

カトリックとロシア正教、接近の兆候

アレクシス2世、モスクワ大司教と共同の司牧活動への希望を表明。

1月18日から25日の教会一致の祈祷週間を前にして、ロシアのカトリック教会と正教会の間により友好的な雰囲気生まれていると見られる。この風向きの変化の予兆は、ベネディクト16世がコンスタンチノーブルとモスクワの両総主教との間に友好関係を保つことができていることに現れていた。

ベネディクト16世は2006年11月に行ったトルコ訪問中に、コンスタンチノーブルの総主教をも訪れた。この訪問の返礼として、今度は正教の総主教バルトロメ1世がローマ訪問の望みを表している。同大首教はすでに何度かローマを訪れている。キリスト教一致促進評議会は、教皇と総主教の会見は来る3月6日ローマで行われることになったと発表した。

降誕祭が両者がさらに接近するためのよい機会となった。パチカン放送によれば、モスクワのカテドラル、救世主キリスト教会で挙行された徹夜祭のミサの終わりに、総主教アレクシス2世がロシアにおける聖座の代表者アントニオ・メンニンニ大司教に近づき親しく挨拶を交わした。

その際に、ロシア正教の首長アレクシス2世はモスクワのカトリックの新大司教パオロ・ペッチ師となるべく早く会見し、共同の司牧のプロジェクトについて話し合いたいという意向を表明した。「モスクワ地方に住むキリスト教徒たちの世話を任されているのは、私か、あるいは大司教様です。だから、私たちは協力して働かねばなりません」と総主教は言う。

ロシア正教にとって、ロシアは彼らだけに任せられた司牧領域と考えられ、それゆえ正教教会は何年もの間、ロシアでのカトリック教会の活動を「宗教勧誘」を目的にしていると非難し続けてきた。この間の事情を考えると、このアレクシス2世の先の言葉は、カトリック教会にとって希望を膨らませるのに足るものである。今、ロシア正教教会がカトリック教会と一緒に活動することを認めたことは、重要な変化を意味する。

モスクワにおける正教教会のナンバー2、キリル首都大司教のインタビューも見逃すことができない。それは”Del Spiegel (2008年1月10日)”紙に載ったものだが、その中で師はカトリック教会と正教会の対立は両者が「互いに相手を必要としない」と考えていたことに原因があると説明している。

それがために、キリル師の分析によると、まず第一に必要なことは霊的な接近である。「我々がいかに多くの文書に署名しようが、それはどうでもよいことだ。我々が互いに愛し合っており、同じ家族に属しており、互いに必要としていることを肌で感じるようになるまでは、一致は不可能であろう」と断言する。

キリル師はそのインタビューの終わりに、ベネディクト16世とアレクシス2世の会見は、「ほとんど確実」と示唆し、それはローマでもモスクワでもないところで、遠くない将来に実現するように両教会は折衝を続けていると明らかにした。

